令和５年度富山県成長戦略会議　第１回新産業プロジェクトチーム　議事要旨

日時：令和５年５月 29 日（月）10:00～11:30
場所：富山県庁３階特別室、オンライン

１．事務局説明

令和５年度新産業プロジェクトチームの進め方について、資料に基づき事務局から説明。

令和６年度に向けた重点的検討課題のうち、ESG（環境・社会・ガバナンス）など国際標準化時代に対応するための取組みについて、事務局から資料に基づき説明。

２．委員の主な意見

〇用語定義が必要（「国際標準化」「ESG」「SDGｓ」「ウェルビーイング」等）

・まず用語定義を整理した方がよい。標準化という言葉もあれば、規格化といった言葉もある。国際標準という言葉の使い方をしっかり整理していかないといけない。標準化と並べるならば、カーボンニュートラル、サーキュラーエコノミー、生物多様性も。規制ではないが国際基準を作っていくという話がたくさん出ている。標準化、基準、規制は異なる。

・カーボンニュートラルの議論は必要不可欠。別チーム（カーボンニュートラル推進本部）の議論と密接に連携し、深掘りしていければと思う。

・脱炭素経営、SDGs 経営、ESG、どこを基軸にするか、根本は同じ。SDGs は最も俯瞰された概念。国際的な金融の評価を受けるとなると、ESG が圧倒的に国際的にも標準で入ってくるが、そこにウェルビーイングが絡むと SDGs となる。

・何を達成したいかということを今日の議論も見据えながら、フォーカスポイントが散らないように、しっかりと落とし込んでいただければと思う。

・国際標準化基準、規制の話があらゆるところから出てきている状況。それを非常に高い視座から読み取って、先んじた手を打ってくことが企業にも地方社会も必要だと思う。こういったレベル感で、視座を挙げて、地方を俯瞰する作業がはじまっていること自体、先頭を切っていると思う。

〇国際的な要求状況について整理が必要

・ＴＣＦＤやＴＮＦＤなど、世界各国の国際機関から、多様な要求がきている。様々な国際的な動きがある中で、今どこで何が起きているのか、誰が何を言っているのかをスプレッドシートのような形で最初に整理する必要があるのではないか。

・例えば①物流業界に関しては、カーボンを多く排出している業者に依頼しないのと同じように、ドライバーを酷使している業者に依頼するのをやめようとの議論の流れもある。（トラックドライバーのウェルビーイング）②人権は規制よりも企業やブランド価値などの評判を損ねるリスクがある等、③地域特性として何を抑えないといけないのか（例えば福井は繊維が強く、ファッション業界の規制を注視する必要があるのではないか）等

〇ESG ウォッシュ（やったふり）ではなく、国際的な議論と齟齬がない施策を。

・本県の政策が国際的に議論しているものと齟齬がなく、〇〇ウォッシュという言葉があるように、うわべだけ環境等に配慮しているとの指摘を受けないよう、実態が伴う評価を受けるような取り組みになればよいと思う。

〇国際包囲網はスピードアップしている。

・カーボンニュートラルの国際包囲網はかなりスピードアップして動いている。ＳＢＴ認証は当然といった話になってきている。のんびりしていると、産業自体が沈んでしまいかねない。中小企業を含めたサプライチェーン全体が、早くそのレベルまで追いかけないといけない。

〇生物多様性とカーボンニュートラルは一体的な関係にある。

・生物多様性は、カーボンニュートラルとニアリーイコール。取組みが非常にクロスしている。両輪をまわしている人たちが先頭を走っていく。二極化が始まったということだと警戒をしている。

・富山県の産業、特に中小企業がそこから漏れないように、しっかりと牽引をしていかなければならないと思っている。

〇デジタルを用いた製品管理の規制がはじまっている。

・例えば、ヨーロッパでは DPP（デジタルプロダクトパスポート）という規制案が通っており、それがないものは、輸入できないというビジネスルールである。

・決められた履歴をデジタルでしっかり管理し、担保できるかどうかどうかがポイント。

・デジタルで要求された可視化情報を商品に入れることもできなければ、サプライチェーンから退出を求められることになる。

・デジタル開示により循環性が高まり、リサイクルも進むのかというとこれは別問題。

・富山県立大学のＤＸといったことが、これから国が国際的なシステムとインターフェイスでつないでいく時代になっていくと想定しているが、そこに地方独自の付加価値を作っていく、デジタルなトレーサビリティを担保する仕組みが必要とされつつある。

・人権や生物多様性に配慮した製品づくりについては、例えばファストファッションなども、産業自体に規制を入れており、対応しないといけなくなってきている。

〇デジタル化の促進がベースになる。

・ＥＳＧもＳＤＧｓも数値として実証していくことが必要であり、デジタル化がどれだけ進んでいるかがベースになる。

・製造業を中心にデジタル化が進み、いち早く国際標準に適している（例えば、デジタルプロダクトパスポートに関する数値が提供できる等）といったことを、成功パターンとして実行することに意味があり、力をいれていくのがよいのではないか。

・一体化が大切。いろいろな領域で起こってくるこれからのイノベーションは、業界関係なくインスピレーションになる。県は場を与える。その場の中で、産学官連携で、一本化して向かっていくという形がふさわしいのではないか。

〇うまくいった事例、うまくいかなかった事例とアカデミアの普遍的な知見を同時に使うことが必要

・業種を超えたインスピレーションが必要な時代になっている。うまくいった事例、うまくいかなかった事例とアカデミアの普遍的な知見の併用が必要。

・可視化のためのデータを最初からすべて取得するという完璧主義ではなく、取得できるデータから取得し、後で補完するというようにトライ＆エラー、試行錯誤すればよい。

〇製造業が一体感をもって進める必要がある。産学官金が連携しみんなで助け合っていかなければならない。

・製造業が多い富山県にとっては本当に重要な問題。中小の事業者の方がこういった世界的な動向を十分に理解していただいていないという点が非常に大きな問題だと思う。

・中小事業者を含めた理解が必要。現状や方策を知ってもらう必要がある。事業者にこういった対応が必要といったことを共有することや、相談窓口などが必要なのではないか。

・事業者が部品を作っているだけだから関係ないと考えてしまっているのではないか。部品こそ大事。いろんなものに使ってもらうため、明確に評価し、世界標準に合致する形で、富山県の製造業の方が一体感を持ってやるということが必要だと思う。

・県が主体性をもち、産学官金が連携するシステムが非常に重要だと考える。１つの企業と大学だけが結びつくのではなく、全体としてのシステムが必要。

・設計自体をリサイクルに対応するよう変えていかないといけないが、富山県内の企業がそこまで考えているかは疑問。そのあたりも含めて、まずは現状を知っていただいて、どうすればいいのかということを皆さんで議論して、方向性を決めて、多くの情報を知っていただいて、やはりみんなで助け合っていくという体制が必要。

〇企業のサイズ、ティア（下請け段階）によって、やるべきことがかなり異なるため、切り分けた議論が必要

・下請企業は、これまでも、元請会社からの指示に応じる形で様々な規制に対応してきたと思う。事前にリスクを負って投資するのではなく、いろいろ決まったあとに対応した方が最適と考えている可能性もある。

・一方、規模が大きく、直接グローバルに取引する企業は、先んじて様々な対応が必要であり、それに対して、県もサポートしなければいけない。国との関係もあると思う。

・今後、切り分けて議論をしないとフォーカスが合わない。

〇会社のトップのみならず、全員の当事者意識が必要

・いわゆる当事者意識にならないと、きっと物事は動いていかない。会社のトップだけがそう思っていてもきっと全体としては動いていかない。

〇今の高校生・大学生はむしろ「SDGｓネイティブ」

・大学生や高校生は、生まれながらにＳＤＧｓな感覚を持ってる。むしろそこに大人たち、或いは産業がついていくっていうような構図ではないか。高校生大学生はもともとＳＤＧｓネイティブということで安心していいんじゃないかなと思う。

〇先駆的な取組みをいくつか作っていく、特定の企業を重点的に支援して、好事例を作っていくことも大切

・いい事例をどう引っ張り上げるか。行政が、えこひいきするのは難しいが、多分やらないと駄目。この会議で決まったからしょうがないくらいの感じで、何か制度的なものをやらなければいけないのではないか。

〇企業トップの認識が大事

・なぜやるのかという根幹を理解しないまま、流行りでいろんなセミナーに出続ける人が実はすごく多い。

・中小企業に成功事例をもたらすには、本当にトップが大事。特に中小企業の経営者は、しっかりと手綱を引き締めていかなくちゃいけないなと思っている。

・プロセスを達成していくため、あなたの会社はちゃんとこれに対応できている会社ですかといったものを可視化し、その戦略策定プロセスからちゃんと開示できないと社会的に認められなくなっている。経営理念や経営方針があり、それに対する計画も開示できなければ、あなたの会社は何もできないだろうと言った評価になる。

〇標準化（ルール形成）に関心をもってほしい。

・標準化（ルール形成）は、特に欧州で関心が高く、能力の高い人が集まってくる領域。日本はその正反対。ルールポジションを決める本当にかっこいいところに、特に未来の子供たちの目線がいかないっていうのは大問題だと思っている。